

◆ 『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo.51（2017年12月号）◆

月日の経つものは早いもので、2017年にお届けする最後のお便りとなりました、会員の皆さま、どうぞよい年末年始をお迎えください。今年の20世紀メディア研究所は、定例研究会に加え、上海師範大学でのシンポジウム開催なども行うことができました。ご協力くださった先生方はじめ、足をお運び下さった皆さまにも御礼を申し上げます。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

**【『Intelligence』投稿に関して】**

ただいま来春の刊行に向けて第18号を編集中です。第19号へご投稿をお考えの方は、20世紀メディア研究所の定例研究会で一度ご発表いただけますと幸いです。2018年度前半期は4月、6月、7月（それぞれ最終土曜日）に研究会開催を予定しております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

**【ブログ用エッセイ募集】**

会員向けブログでのエッセイは、すでに第20回を重ねております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なされたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局 ([m20th@list.waseda.jp](mailto:m20th@list.waseda.jp)) までご連絡下さい。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

**【活動報告：諜報研究会】**

11月25日、NPO法人インテリジェンス研究所主催の第21回諜報研究会第I部として、旧陸軍関連施設の見学ツアーを実施しました。天気にも恵まれ、多くの方がご参加くださいました。陸軍軍医学校跡地に建つ国立感染症研究所では、工事中に発掘された人骨を納める施設と軍医学校時代の昭和天皇行幸記念碑を見ました。それから東京第一陸軍病院跡地に建つ国際医療センター前を通り、戸山公園内では秘密機関「山」があったと想定される場所や防疫研究室、陸軍戸山学校軍楽隊の野外音楽堂跡地などを見学しました。

【20世紀メディア第115回研究会報告】(11月18日(土)午後2時30分～5時30分)

① 安野一之「もう一つの出版検閲——戦時下の税関検閲について」

国立公文書館蔵の新発見資料「風俗輸入禁止書籍等保管台帳」に基づき代表的な輸入禁止書籍、税関における鑑別標準、税関検閲と内務省、逓信省等の方針の関係などについて考察された。今回の台帳は神戸における税関検閲を記したものだが、今後他の国際港の台帳が発掘される可能性もあり、研究の広がり可能性を示唆するものであった。

② 吉本秀子(山口県立大学国際文化学部)「エドワード・リリー文書でみるアメリカ心理戦史1945-1953」

1945年12月31日の戦時情報局・OWI (Office of War Information) の解散から1953年9月の合衆国情報庁・USIA (United States Information Agency) の設立までの空白の時期を取り上げ、米統合参謀本部(Joint Chiefs of Staff, JCS)で心理戦に関する特別顧問を務めたエドワード・リリーが書いた『アメリカの心理作戦の発展1945-1951 (The Development of American Psychological Operations 1945-1951)』は、この時期の米国の情報政策立案者が「心理作戦」をどう捉えていたかをうかがわせる貴重な史料であることを報告した。

③ 小林昌樹(国立国会図書館)「昭和2年における出版検閲作業のフローチャート分析(図版)」

本報告は、研究史として、出版検閲研究の制度論、実体論の研究はこれまでも進められてきたが、戦前の内務省検閲については、検閲事務の実態が不明であるとの問題意識に基づき、「発売禁止道中双六」(梅原北明編『文芸市場』1927年8月号)「新聞紙法による発売禁止の経路図」(『政治批判』1927年10月号)の2資料から、新聞・出版の両検閲のフローチャート(作業流れ図)を発見したこと受け、これら2資料の比較検討を通じて、新聞検閲、出版検閲のワークフローの異同を明らかにした。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。

<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい

【コラム：師走と労働】

先日、久しぶりに立ち寄った新刊書店で、吉野源三郎による古典『君たちはどう生きるか』(1937年)の漫画版が評判となっていることを知った。会員諸氏の中にも、この本を若い頃に読まれた方は多いことだろう。「岩波教養文化」とは縁のない少女時代を送ったため、恥ずかしながら大学院に進んでからこの本を読んだ身だ。主人公の少年が「自分も社会の関係性の中で生きている」と気づくエピソードは、まるで資本論入門を読んだようで、教養の

深さに驚いたことは記憶に新しい。「生産者」と「消費者」が世の中に存在することを知った少年は、おじさんに「コペルニクスの転回」を遂げたと評され「コペル君」と呼ばれることになる。遅い読者であったため、コペル君よりはおじさんに近い年齢ではあったが、自分にもこういう風に社会の仕組みを教えてくれる存在がいたらなあ、と嘆息したものだ。それから十年以上の時が経ち、同書のおじさんよりもおそらくは年上のおばさん(!)となったが、平易な言葉で学生たちに「社会の仕組み」を説く自信を持つことは相変わらずできない。ただ、「労働」などと堅苦しい言葉で表現せずとも、無数の働く人たちが自分の日常を支えていることには気が付くようになった。それはもしかしたら「想像力」の産物なのかもしれない。同書が発表された年は日中戦争が勃発した年、国家が国民を「戦力」という抽象的な単位を以て見做すようになった時期であったことを思うと、70余年の時を経て、再び注目されている風潮には警鐘の響きも伴ってはいないだろうか。身近な他者の表情を思い出しながら、日ごろは敢えて口に出すこともない感謝の気持ちをこめつつ、年賀状をしたためること、そんな慣習を疎かにしないことから「社会の仕組み」は出来ているようにも思う。

[12月1日付 文責：鈴木貴宇]